



第24号
2016年2月8日
この通信は生徒と保護者の皆様に向けて、編集・発行しています。

卒業にむけて

林 建

三年生の君たちと一緒に学ぶことができる日も、あとわずかになりました。君たちの成長の喜びと、受験が早く無事に終わってほしいという思いとは裏腹に、一日一日減っていく日めくりの数字について寂しさを感じてしまいます。

私が好きな詩に、谷川俊太郎の「生きる」という詩があります。「生きているということ いま生きているということ…」で始まる詩です。小学校で読んだことがある人もいるでしょうか。私自身、君たちと歩んだこの三年間で、「生きる」ということにあらためて考えさせられたことが多くありました。卒業にあたり、私なりの「生きる」の詩に合わせてこの三年間を振り返ってみたいと思います。

生きているということ いま生きているということ
それは「変わる」ということ

一年生は「変化」の一年でした。人間関係も生活習慣も変わり、トラブルも増えました。1 I のみんなの成長の早さにも驚きました。小学校から上がったばかりの小さな子どもたちが、たった一年間で制服は小さく、声は低く、敬語も使えるようになってきました。(今だに使えないままの人もいますが…)

生きているということ いま生きているということ
それは「失う」ということ

二年生では、2 H で大切な「命と向き合う」こと、そして「生きている」ことが当たり前のことではないことを感じました。と同時に、いのちの強さと、人のつながりの強さを感じた一年でもありました。

生きているということ いま生きているということ
それは「生む」ということ
それは「生まれる」ということ
あなたの手のぬくみ
いのちということ (谷川俊太郎「生きる」より)

三年生では、私にとって大きな出来事がありました。長女の誕生です。薄暗い分娩室の中で、かすかに聞こえた産声。両の手のひらに収まるほどの細い身体。守ってやらなければ、愛してやらなければ、そう思われました。一睡もしないまま、その足で体育大会に遅れて参加しました。先生方、室長たち、そして応援席で本当にたくさんの生徒たちから「おめでとう」をもらいました。担任不在の中、団結して優勝を経験させてくれた3 E の笑顔が待っていました。忘れられない一日です。

君たちも、同じようにして生まれてきました。誰もがか細く、小さく、そしてかすかなぬくもりをもって生まれてきたのです。そんなことを考えたら、また三年生がいとおしく、そして名残惜しく思えてきました。

皆さんは卒業後、新しい環境で生きていくことになります。そこでは「変わる」こと、「失う」ことも数多く経験するかもしれません。それでも、君たちならば新しい何かを「生む」こと、創り出すこともできるはずです。たとえ新しい環境が厳しいものでも、それを乗り越えれば、きっと君たちなりの「生きる」の詩を綴ることができるでしょう。いつかそれが完成したとき、爽やかな春風とともに、見せに来てください。